●一一票差で激戦制す

こうした運動が功を奏し、小海・小淵沢線は「小海線」と命名され、一九二三（大正12）年には工事が始まった。だが、関東大震災や、鉄道建設に消極的な憲政会政権の誕生などで、翌年には工事は中止となった。

こうなると、あとは政治の力で解決するより方法はなかった。たまたま南北佐久を選挙区とする衆議院長野九区では、代議士の岡部次郎が病死したため、一九二五（大正14）年に補欠選挙をすることになった。チャンス到来とばかり、篠原は政友会から出馬、憲政会の中山武三郎と争うことになった。

二人はともに南佐久の出身。中山が佐久の名家の生まれに対し、篠原は新聞記者出身。資金力では大きな差があった。このため「金権候補か、清貧候補か」といったビラさえ乱れとび、激しい選挙戦となった。

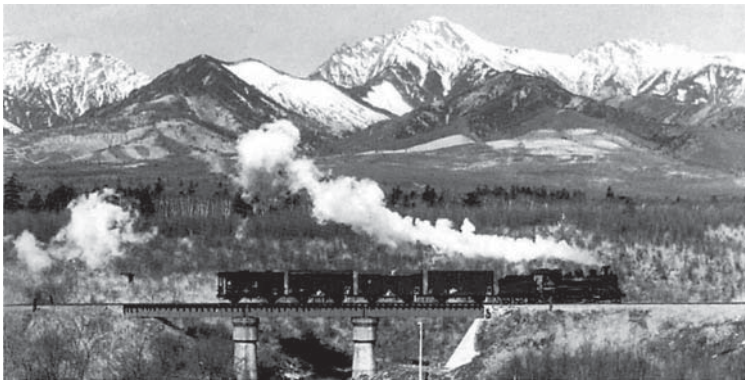
投票の結果は四四八七対四四七六。わずか一一票差で篠原に凱歌。一二〇年に及ぶ長野県総選挙史で、かくも激しい選挙記録は他にその例がない。

昭和になって、「工事中止となった鉄道をそのままにしてよいか……」という声が全国に高まった。工事を渋る政府も工事再開を決めた。

このころ、篠原は小海線全通のため、日夜にわたる激務がたたり、一九三〇（昭和5）年の総選挙も病身で街頭に立った。結果は最下位でかろうじて当選したが、選挙の六か月後に四九歳で急死した。まさに小海線全通のために、その生涯をささげた政治家の最期であった。

●白亜の野辺山駅に一番列車

小海線の工事は、小海、小淵沢の南北二か所から始まった。佐久鉄道の小諸―小海間も、一九三四（昭和9）年には鉄道省に移管された。工事は最後に残った小海北線の信濃川上と、小海南線の清里の区間が一九三五（昭和10）一一月二九日に結ばれた。



最後の工事となった信濃川上－清里間の鉄橋を通過するC56蒸気機関車。
小海線が全通した頃から1972（昭和47）年まで走り続けた。
（写真提供　磯貝憲正氏）

思えば佐久鉄道が小諸―中込間に工を起こして二二年目、小海線はここに、全路線七八．九キロの全線開通をみた。

この日の野辺山高原は、初冬の冷たい陽をあびながら、さわやかに晴れわたった。八ヶ岳もこの朝一番列車を歓迎するかのように、新雪できれいに化粧された。流線型で白亜の野辺山駅も、この高原列車を迎えるにふさわしく、その壁は目に痛いほど、初冬の原野に光っていた。

初代野辺山駅とC56

そして、二〇一五（平成27）年には、佐久鉄道敷設一〇〇周年、小海線全通八〇周年を迎える。

（中村勝実）

・・・

佐久の先人たち㉖

小海線全通に生涯をかけた政治家

篠原和市（しのはら わいち）

（1881～1930年）

一介の新聞記者ながら、小海線全通期成同盟委員長になり、その生涯を小海線にささげた政治家。だが、全通を前に急死、晴れの祝賀会では小海線全通功労者として、その名を呼べども彼の姿はなかった。

●政界の大物、小川の現地踏査

篠原は伴野村（現佐久市伴野）の出身。青春時代は、島崎藤村が教べんを執っていた小諸義塾で学んだ。藤村が名作『破戒』の執筆を終え、その原稿をたずさえて上京したとき、篠原もまた、後を追うように東京へ出た。日本大学を卒業後、東京日日新聞社（現毎日新聞社）に入社、政治部記者となった。

当時、佐久鉄道は小諸―中込間についで、小海まで開通したが、当初は順調だった経営も、第一次世界大戦後の不況で経営は傾き、計画していた小淵沢までの延長は絶望的となった。

そこで佐久鉄道を鉄道省に移管し、小海―小淵沢間は省線として建設しようと地元で計画され、その全通期成同盟会が東京で開かれた。たまたまその取材に訪れた篠原が、情報通で鉄道当局にも顔がきく、というところから委員長に推されてしまった。

当時の政界では、政友会が地方にくまなく鉄道を建設し、改良はその次という「建主改従（けんしゅかいじゅう）」政策。これに対し憲政会は建設よりレール幅を広くして、電化するなど改良を主にし、建設はその次という「改主建従（かいしゅけんじゅう）」主義だった。そこで篠原は長野県出身の政友会の重鎮、小川平吉を動かし、予定線の小海―小淵沢間を馬で踏査、それによって世論を高め、建設に結びつけようと計画した。

現地踏査は一九二二（大正11）年八月二日に行われた。この日小川は、日覆いのゴザを背に麦わら帽、巻脚絆（まきぎゃはん）といういでたち。同行者は三十頭の馬とともに、小淵沢から小海へ向かった。新聞記者も同行した。

騎馬パレードが野辺山まで進んだところ、長野県側の大歓迎陣に迎えられた。それが余りにも多かったので、馬もびっくりして暴走、小川は落馬してしまった。ケガはなかったものの、「大政治家の落馬」という思わぬニュースが、翌日の紙面におどった。小海・小淵沢線は一躍、世間に知れわたった。

当時全国では一四九の予定路線が工事線参入をめぐって、激しい争いを展開していた。篠原は「新聞記者兼期成同盟委員長」という〝両刀使い〟で鉄道省へ足を運び、大臣の取材が終わると、すぐに陳情に早変わり。その回数は百回余りに及んだという。そこで大木遠吉（おおきえんきち）鉄道相も「あれは篠原鉄道だ」と二ガ笑い。

中込の成知公園内にC56蒸気機関車とともに保存されているガソリンカー。篠原が世を去った年に導入され、小海線全通後も走り続けたが、戦時体制下の燃料不足により運行が廃止された。